

横浜善光寺
留学僧育英会

新育英生三人に辞令

横浜善光寺留学僧育英会（黒田武志理事長）

の第十三回育英生辞令交付式が、平成九年二月八日午後二時から善光寺で挙行された。

式典に先だち本堂で、開山樞庵白純大和尚の十九回目の年忌法要と前ロシアンゼルス禅センター主管・前角博雄大和尚の三回忌法要が江川總持寺監院の導師で営まれた。法要後、江川監院は「御開山白純大和尚様と私の父とは大学時代からの同級生だ。小さい時から関東の黒田という名前を聞いていた。白純老師も瀬戸の私の寺へ来られたことが昨日のこのように去来する。当山の方丈さんの一番上のお兄さん（栃木県大田原市・光真寺の黒田俊雄住職）と私は同

級生だ」と善光寺との因縁を語った。

また「我逢人（がほうじん）」という言葉を引き、「我れ人と逢うなり」という三文字だが、素晴らしい言葉だ。人生は出逢いが全てというが、一瞬一瞬の出逢いに日々支えられているのが私の日常だ。人と人、心と心、物と物の出逢いであり、死ぬまで我逢人です」と、出逢いの尊さを説き、「黒田老師はたくさんの仕事をしておられる。強く引きつけられる迫力は、黒田老師ならではのものだ。それを皆さんも慕っておられると思う」と黒田理事長の力量を称揚した。

引き続き辞令交付式に移り、永平寺の宮崎奕保貫首からの祝電が披露された。宮本延雄理事



開山樅庵白純大和尚年忌法要

仏祖諷經





東理事



江川老師

宮本理事



(鶴見大学学監)が育英生選考の経過を報告し、今回採用した東京大学大学院博士過程の久間泰賢氏はウィーン大学へ留学、韓国の洪在成(ホン・ジェ・ソン)氏は花園大学大学院修士課程に在学、山口菜生子氏はケンブリッジ大学に留学、またケンブリッジ大学に留学中の清水晶子氏が継続採用され、それぞれ研鑽を積んでいることが伝えられた。

黒田理事長の導師で仏祖諷経の後、育英生一人一人に黒田理事長から辞令と育英金の小切手および記念品が手渡された。この後、東隆眞理事(駒沢女子大学学長)が激励の言葉を述べ、「この育英会は、黒田方丈の若い頃の海外留学体験を踏まえて出来た。これからの僧侶は国際的でなければいけないと、仏教の活性化を願い、檀信徒の方々の御理解・協力をいただきながら継続されている。このことを充分理解して御活躍いただきたい」と育英生に選ばれた意義に目

を向けるよう喚起した。

さらに、二十一世紀を担う若い仏教学徒への期待を込めて、「人間の生き方、生きる意味を考えることが問われている。常に国際的で普遍的な視野に立ち、これからの世界人類のための仏教を学んでほしい。学のための学というものは仏教にはない。どこまでも仏の教えを学び、いかに自分のものにしていくかでなければならぬ。日本は仏教の国でなく仏教学の国だといふ、皮肉を込めた批判がある。後ろ向きの仏教学でなく、新しい、前向きの仏教を創造していく心構えを持った挑戦であつてほしいと願っている。机上の学問ではいけない。明日の人類に役立つ学問に実践的に取り組んでいただきたい」と励ました。

なお、これまでに採用された育英生は七十九人にのぼる。

留学僧として私はこれを学びたい

久間泰賢

(一) 研究の動機

まず最初に、私が仏教徒として現在の研究テーマに辿り着くに至った過程を簡単に述べさせていただきます。

私は曹洞宗寺院の徒弟として生まれ、年少時からその教義に親しく接してきた。曹洞宗は「只管打坐」をその主な宗旨とし、言葉を介さぬ黙照禅の実践に重きをおく宗派である。したがってそこでは、「不立文字」―真理は言葉によつては表現され得ない―という立場が強調される。この立場はもちろんインド仏教において、すで

に存在している伝統的なものであり、その伝統を曹洞宗も忠実に受け継いでいるわけである。

しかし、言葉を用いなければ、教化活動、もつと一般的に言えば他者との交流が困難であることもまた事実である。特に現代においては、日本仏教の国際化が強く要請されており、したがって当然ながら、異文化の人々にも接触していかなければならない。このような場合に「不立文字」のみがすべてを解決することはありえないのである。

おおよそ以上のような問題意識を出発点として、私の関心は「曹洞宗と言葉」、より広義には



「仏教と言葉」という方向へ向かっていった。その後、インドにおける仏教が「言葉」による精緻な思索の体系、すなわち認識論・論理学的な体系を有していることを知り、その研究に従事することを決意した。

その際、特に関心を惹いた研究テーマは、仏教の根本教理である「諸行無常」「縁起」——これらの解釈は道元の『正法眼蔵』でも重要な問題となる——が認識論・論理学的にいかにか考察され

ているか、という問題であった。そして現在は、「諸行無常」を発展させた理論である「刹那滅論」を中心に研究を行っている。

(二) 留学の必要性について

「刹那滅論」研究において重要な意味を持つテキストは、後述の研究計画でも述べるように、インド仏教における主要な学者の一人ジュニャーナシュリーミトラ（十―十一世紀）の著作『刹那滅章』である。この著作によって「刹那滅論」は事実上完成するに至ったと学界では推定されているからである。

ただし、研究の第一次資料である『刹那滅章』のサンسكريット語写本は、ウィーン大学以外では現在入手しにくい状況にある。また、ジュニャーナシュリーミトラ研究に関しては、ウィーン大学のシュタインケルナー教授が世界的権威として認められている。これらのことを考慮

するならば、この研究はウィーン大学において行われることが最も望ましいであろう。

(三) 研究計画

〔研究題目〕

インド仏教における刹那滅論の展開

〔研究副題〕

ジュニャーナシュリーミトラの『刹那滅章』

における因果性について

〔研究計画概要〕

初期仏教以降、「諸行無常」の思想は仏教の基本教理を形成してきたが、後代に到ると、「諸行無常」の発展形態として「刹那滅論」が出現してくる。「刹那滅論」は「諸行無常」の思想が極限化・精密化されたものであり、あらゆる事物は瞬間毎に消滅しながらも存続し続けるというテーゼを持つ理論である。

この理論は、インド仏教における主要な学者

の一人であるジュニャーナシュリーミトラの著作『刹那滅章』によって完成するに到った、と学界では推定されている。しかしその重要性にもかかわらず、この著作についての研究は、いまだ十分なものとは言い難い。したがって、この著作の内容を解明する試みは、関連分野の研究の進展に大きく貢献することが期待される。

その『刹那滅章』において特に重要な論点は、刹那毎に消滅する事物には果たして因果関係が可能であるのか、という点である。もし事物が瞬間瞬間に滅しているのならば、この世において様々な現象が持続的に認識される理由が説明されねばならない。この点についてインド仏教は、インドにおける他の哲学学派と激しい論争を行い、またそのことによって「刹那滅論」の理論的完成度を高めてきた。本研究ではこの論点を絞って、そこに見られる「刹那滅論」の発展の過程を明らかにしたい。



具体的な作業としては、まず、ウィーン大学所蔵のサンスクリット語写本を用いて、『刹那滅章』についての文献学的調査を行い、テキストの校訂を進める。その後『刹那滅章』及びそれに関連するテキストの読解を進め、論文執筆の基礎的作業を完成させる。それと並行して『刹那滅章』訳注の作成を進める。

以上の作業が完了した後、最終的に論文の執筆に入る予定である。予定されるタイムテーブルは左記の通りである。

① 『刹那滅章』のサンスクリット語写本を用いた文献学的調査

九七年九月～九七年一〇月

② 『刹那滅章』及び関連テキストの読解

九七年十一月～九八年一月

③ 『刹那滅章』訳注作成

九八年二月～九八年四月

④ 論文執筆（独語あるいは英語で）

九八年五月～九八年八月

完成した論文はウィーン大学に博士論文として提出し、博士号を取得した後、その論文をウィーン大学出版会から出版することを希望している。

久間泰賢氏経歴

一九六八年福島県生まれ。東京大学文化人類学入学。同大学インド哲学科卒業。九四年四月東京大学大学院人文社会系研究科インド哲学専攻、在学中。九五年より帝京大学非常勤講師。オーストリア・ウィーン大学留学。仏教の「諸行無常」の認識論、論理学の研究をしてきた。

宗教学と私

山口 菜生子

何故、宗教学を専攻することにしたのか、そう立ち止まって考えると、簡単に答えることが難しく、言葉につまってしまう。

個々の宗教の教えや実践への興味、また教えについての様々な解釈への興味、さらには教祖たちや教えを記した書記官たちへの興味から、教えの歴史的背景や歴史的発展などへの興味と、いったことが、とりあえずあげられる。また、宗教というトピックの豊かさの魅力。宗教は、その起源から問うていけば、哲学、心理学、歴史学、政治学、経済学、民俗学、文化人類学など、無限に多様な分野と繋がっていく。しかし、

宗教学を勉強しようという決め手は、私の場合、どこか別のところにあつたように思われる。

私は、家庭環境からか、個人的資質からか、子供の頃より聖書や仏典を読み、その思想や教えなどに親しんで、そこから大きな影響を受けた。余りに若い頃の影響というのはいつもそうだが、それは、考え方を左右するとかいったレベルにはとどまらない、個人の在り方そのものを規定するような、ある種の決定的体験だった。

私は、言葉によって、さらに日本語という特定の言葉によって、ものを感じ、考え、表現す



妙心在在處處
信



るといふ特定のプロセスを身につけた。そのため、言葉というものについて考えようとすると
きにも、言葉を用いずには、そうすることがで

きない。

言葉に限
らず、何
か自分を
根底から
支え、位
置づけて
いると思
われるも
のについ
て問うこ
とは、常
にこのよ
うな苛立
ちをはら

んでいる。私は、言葉によって豊かにされてい
ると同時に、言葉によって限定されてもいる。
それと同じように、私は、宗教によって豊かに
されていると同時に、宗教によって制約されて
もいる、と感じてきた。(これは、言うまでもな
く、戒律に従うことによって得られる恩恵はあ
りがたいが、戒律の厳しきは嫌であり、かとい
って、戒律に従わないで、結局は自分にそのつ
けが回ってくるのも嫌だ、といったことは違
う。)そのため、宗教のことを考えることは、い
つも一種の嫌悪感があった。

私は物心ついたときには、すでに自分を「宗
教的」だと感じていた。神様がいる、仏様が
いると、何の疑いもなく信じており、また自分は、
そのような、自分より絶対的に優れており、ど
んなことでもできる存在に支えられ、守られ、
裁かれて生きているのだと、思っていた。そし
て、自分はそうした存在に従順であることによ

ってしか生きてはいけないのだと、恐れ、おのいていた。これは、フロイトやスピノザが言うように、親子関係を超越との関係に投影したイメージだったと思う。はつきりそうではないにしろ、ともかく、超越的なものと自分との関係を、親子関係ほど単純にとらえるものがないのは、確かだろう。世界宗教の教祖たちも、超越へのそのような盲目的で無条件的な従属を教えている様子はない。しかし、この擬似親子関係を克服してからも、宗教は、私にとって何らすつきりしたものにはならなかった。

キリスト教の聖者のひとりに数えられているアッシジのフランチェスコの祈りに、こういうくだりがある。「神よ、理解できないことに耐える力をお与え下さい」。私は、理解できないもの全般を、「宗教」という言葉とそのイメージに担わせてきたと思う。もちろん、一般的な意味での宗教もその全般の中に入っている。私は、この

「理解できないもの」を、単に教養も知も及ばないというただけにとどまらない、知そのものを脅かすようなのだと捉えている。

例えば、私は（宗教を含む）異文化体験を通して、諸々の文脈に通底する全体的視点を獲得するどころか、何事にも絶対的な基準というものはないと、つくづく思い知らされてきた。また個々の宗教は「寛容」を説いていても、それぞれの宗教の教えは、わざわざそういうふうな解釈しない限りは、相容れないということも、目の当たりにしてきた。「寛容」を説く宗教が、紛争のもとになるというのも、驚くに足りないと言える。個々の文化や宗教の原理は同じで、あらわれにおいて異なるだけだと言って、ことを相対化してみても、無駄に思える。相対的姿勢も、一つの特定の立場に過ぎず、他の多くの立場に較べて優位にある理由はどこにもないからだ。矛盾を統一する決定的立場などというも

のではない。こうして、私の宗教体験は、知を深めたり拡大するより、知の基盤を一貫して失効させ続けてきた。

私は、宗教から解放されたいと、とても長いこと願ってきたと思う。それは「理解できないこと」に絶えず足場を危うくされていることに我慢がならず、それから自由になりたいという思いだった。しかし、(宗教によって、宗教を克服しようとする試みも含めて) 宗教を何とかして克服してしまおうとする、この必死の思いが、どこかで、ふと変化したのだった。この変化のきっかけは、自分が宗教や「理解できないこと」から解放される日は、恐らくやってこないだろうという、漠然とした認識だったと思う。そして、その認識は、多分、インドへの留学体験をきっかけに徐々にはつきりしたものとなった。宗教学を勉強したいと思ったのも、この頃だった。宗教から逃げる意味は、もうなかった。

宗教への知識、洞察を身につけるのに、宗教学にこだわる必要はもろんない。大学で教わっているような宗教学に、ともかく一見したところ、何ら「精神的」なところはないし、また精神的なことを勉強する必要もない。それまで通り、哲学を勉強してもよかったし、好きな文学を勉強してもよかった。大学で勉強することに、こだわる理由さえなかった。

しかし、私は大学で宗教学を専攻することを選んだ。自分の在り方を存在から意識のレベルに至るまでまるごと規定している宗教と呼ばれているものに、知、情、意のすべてのレベルで向き合うことを望んでいたからだと思う。この選択は、耐え難い「理解できないもの」から解放されようとするかわりに、それを受け入れていこうという気持ちの表現だった。私の選択は、儀式的役割を果たしており、いわば象徴的なものだった。

しかし、ケンブリッジ大学の神学・宗教学部在学も二年目を迎えた現在、純粋に象徴的だった私の動機が、にわかには具体性を帯びてきている。昨年一年の勉強を通して、宗教学への興味が、刺激され、深まり、生き生きとしたものになってきたのだ。

宗教学の勉強が、私にとって、「理解できないことに耐える」ための道具立てであることをやめ、耐えていくこと自体の一環となり始めていることは確かであり、これからはますますそうなり、そして長いことそうであり続けるだろう、という予感がある。

目下私は、ユダヤ、キリスト教を中心とした、宗教の歴史、文献学、宗教哲学などを、選択している。大学の勉強に加えて、ケンブリッジという国際色豊かな土地柄の恩恵に与かり、イギリスのキリスト教徒の他にも、アジアの仏教徒、西洋の仏教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒など

と知り合い、かなり親しく交流することができ、ここからも大きな収穫を得ている。これらの経験は、私に様々な文脈を覗かせてくれると同時に、自分が今まで親しんできた仏教をはじめ、日本という国の神道や、仏教的文脈一般などを見直させるきっかけにもなっている。将来は、宗教が人間の諸々の病状や悪状況に対して、どのような治癒と和解の可能性をもっているのかを、仏教をベースとして、比較宗教学、宗教哲学などの立場から考察してみたいと考えている。

山口菜生子氏経歴

一九七二年静岡県生まれ。一九九〇年東学院で中村元博士のもとで、東洋の宗教・哲学を研究、一九九二年インド・デリー大学入学。九三年デリー大中退。九五年七月イスラエル・ヘブライ大学留学。九五年十月英国ケンブリッジ大学神学・宗教学部入学。

これからの国際交流と仏教の役割

洪 在 成

仏教は印度に発生し、二つの潮流となって流
伝された。一つは、チベット、中国、韓国、日
本など極東の諸国をはじめ、東北アジア全域に
流れてきて大乘仏教圏を形成した。そして他の
一つは、いわゆる上座仏教と呼ばれる一流で、
南方仏教の諸国に伝播したのである。

これら両潮流の仏教思想と実践が、今日、洋
の東西を問わず、世界の文明を維持する大きな
支柱的役割を十分に果たしていることは言うま
でもない。

私がここで採り上げたい論題は「これからの
国際交流と仏教の役割」である。

このテーマは言い換えてみれば、今日の仏教
は果たしてその役割を十分に果たしているかど
うかの問題であり、二十一世紀の国際化時代に
向かって、新しい仏教はどのような役割を持つ
べきであるか、ということになると私は思う。

そのように考えると、ここに二つの問題が浮
かび上がる。一つは国際交流に向かつて、必要
不可欠な条件は何であるかということ、もう
一つは仏教の役割について、もっと広い視野か
ら、つまり現代宗教全体の持っている問題から
考えるなら、仏教として今日の時代に何を果た
すべきかということについて、もっと近づける

のではないかと思うのである。

先ず、現代宗教の立場から見ると、過去において宗教が人類のために肯定的に果たした役割は、「道徳の枢軸を立てること」と、「平和の文化を創造すること」であった。

この点から見れば、過去において宗教を通じての国際的な文化交流は、彼此の文化、経済、及び社会の発展に対して、至大な貢献を与えたと言えよう。特に最近、韓・日・中国間の学術交流や寺院の姉妹関係を見ても、以前よりずいぶん活性を帯びてきていることは、仏教界がよりよい国際交流のために働いている一つの証であると思う。

このような実践的方法面において、私はここで寺院間の関係を一層深めるために、もし出来るなら「受戒」を通じての交流が積極的になされることを提案したい。(例えば、具足戒の時に、七證師を各国の僧とする等)

宗教、特に仏教の究極の境地は、知識でもまた論理や儀式によって保たれるものでもない。それは「体験」によるものであると私は思う。

「受戒」、特に印度から伝えられた「八關齋」とは、支那・新羅(高麗まで)において国家的な行事であったが、それは貧富貴賤を問わず、民間に広く伝えられたという記録が見えているからである。

ともかく私は、「受戒」を通じて、世界の人類が仏教信者として一つに結ばれ、物質文明に抑えられてきた精神文明を、もう一度立て直す必要があるのではないかと信じている。

次に私は、仏教は今や教団主義を脱皮しなければならぬと考える。教団主義というものは、一つの宗教が積み重ねてきた長い伝統と歴史をベースにして、教団が自己の権威を示すことばかりに汲々とし易い。だからこそ、仏教者はその固定観念から脱皮して、他宗教の教えについ



ても、良いものは信徒たちにも説かなくてはならないし、また脱皮した立場から他の宗教者、あるいは無宗教の人たちとも人間としてのより開かれた態度で、共に対話できるような雰囲気を作りなくてはならない。

そして各宗教は、自己の教団の運営の仕方についての改善策の一つとして、それぞれが「信用金庫」のようなものを準備しておく。それを次々に発展させ、やがて他の宗教教団にまで信

用去来が叶うような状況にまでならなくてはならない。

無論そこから出来た小さな利益は、運営上の費用を除外して凡て社会奉仕の方に施す、ということは言うまでもない。

即ち、教団を脱皮した未来の宗教は、貧民老弱者・病者・障害者たちの救済のため、奉仕活動を推進できるような共同のセンターを用意しなくてはならない。

最後に、もっとも期待されるべき仏教の役割は、国際的レベルで諸宗教が協力し合えるような機構が出来て、それが世界に向かって活躍することである。

今後、世界はますます狭くなって行く。そのために今日、世界諸国の政治・経済・社会は、人類共同に向かって日進月歩の目覚ましい働きをしているのである。

この時代において、宗教と政治と科学の三者

もその関係のバランスを崩さないように注意される必要があると思う。その為にも諸宗教の国際協力機構の設立が望まれるところである。そうなった場合の仏教の役割を考えると、それらは列挙できないほど多いと思う。

巨視的なメカニズムを通じての国際情報の交流、コミュニケーションによる仏教文化の交流、国際仏教徒の視野から可能になるカウンセリングの交流をと、さまざまな点からの可能性を考えることができるであろう。

以上、手短かに延べさせていただいたが、国際交流の仏教の役割は、実際に運営・実現化するには、さまざまな難問を解決しなければならぬ。国際的に目が届くと、猫の手も借りたいだろう。だから同じ状況に陥り込まず、いつも物を新しく見る必要があると思う。

戒を通して、丸執着しない清らかな心を養成するのも、国際交流の仏教の役割に大きな一視

点になると主張したのである。

洪在成氏経歴

一九五五年韓国生まれ。一九八四年海印寺僧伽大学卒業。八四年～九〇年全国禅院安居、九一年花園大学入学、九五年同大学卒業。現在同大学文学研究科修士課程仏教学専攻二年次。仏教と民衆との接点である信行の三階教の研究を続けている。日本留学。

